様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：２４２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７３０７５５

研究課題名（和文）日豪比較を通した開発教育における教育評価の方法論の構築と教育評価実践の探究

研究課題名（英文）Development of theory on assessment and inquiry of the way to implement assessment effectively in development education through comparative research on the accomplishment in Japan and Australia

研究代表者
木村　裕（KIMURA, YUTAKA）

滋賀県立大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：９０５５１３７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、オーストラリアにおける開発教育の研究蓄積を批判的に検討することによって、開発教育における教育評価の方法論を構築するとともに、日豪での授業研究を通して教育評価実践のあり方を探究した。そして、主に、「教育目標および評価指標の開発を通した評価課題と評価方法の設定の論理の探究」「教育評価実践のあり方の提案」「授業研究の推進を通した理論の精緻化と実践の提案」「研究成果のまとめと学校を中心とした実践の場への発信」を行った。

研究成果の概要（英文）：　Through analyzing critically the accomplishment of research on development education in Australia, this research aimed to develop theory on assessment in the field of development education and to inquire the way to implement assessment effectively through lesson studies in Japan and Australia.
The main findings of this research were to 1) inquire the logic to set assessment task and method through developing educational goals and rubrics, 2) suggest the ideas about how to implement assessment effectively in classroom lessons, 3) elaborate the theory through lesson studies to suggest practice based on the elaborated theory, and 4) organize the findings through this research and put out the findings and ideas mainly to teachers.

研究分野：教育方法学

キーワード：開発教育　グローバル教育　教育評価　授業研究　教育方法学　オーストラリア

１．研究開始当初の背景

開発教育とは、「私たちひとりひとりが、開発をめぐるさまざまな問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、共に生きることのできる公正な地球社会づくりに参加することをねらいとした教育活動」（開発教育協議会編集・発行『開発教育キーワード 51』、2002 年、p.69）である。近年、貧困や格差、環境破壊などの地球的諸問題の解決に向けて各国の協力が求められている。こうした地球的諸問題の解決や公正な社会づくりに関して、日本が国際社会において中心的な役割を果たしていくためにも、今後、日本における開発教育の重要性はますます高まることが予想された。

日本では開発教育協会や外務省が中心となり、開発教育に特徴的な参加型学習と呼ばれる学習方法を取り入れた実践事例の紹介や関係者のネットワークづくりなどを進めてきた。しかしそこでは、教育内容の選択やカリキュラム編成の方法論などに関する理論研究と、それに基づく実践研究をさらに充実させる必要があると考えられた。

こうした問題意識に基づき、研究代表者はこれまでに、科学研究費補助金（特別研究員奨励費：2008 年度、および若手研究（スタートアップ→研究活動スタート支援）：2009～2010 年度）を受けて、オーストラリアの研究蓄積に着目した研究を進めてきた。具体的には、オーストラリアの開発教育の理論と実践の到達点と課題を批判的に検討することを通して、開発教育の目標設定、カリキュラム編成、および授業づくりに関する理論構築を進めてきた。その主な成果は、「開発教育の歴史的展開の解明」「教育学的な視点から見た理論的到達点の検討」「理論に基づく具体的なカリキュラム案の検討」「授業研究を通した具体的な実践の分析と検討」の 4 つにまとめることができた。

ただし、これまでの研究では、教育評価に関する研究が十分であるとは言えなかった。教育評価は、学習者の学力保障および教師による授業の改善のために不可欠の要素である。なぜなら、学習者の成長やつまずきの実態、授業の成果や課題を正確に把握しなければ、個々の学習者に必要な支援策を講じることや適切な授業改善を行うことができず、設定した教育目標の達成も保障され得ないためである。

以上をふまえて、開発教育論の中でも特に、教育評価の方法論の構築と、それに基づく教育評価実践のあり方の探究が次の課題であるとの認識に至った。これが、研究開始当初の主な研究の背景である。

２．研究の目的

以上の背景をふまえ、本研究では、オーストラリアにおける開発教育の研究蓄積を批判的に検討することによって、開発教育における教育評価の方法論を構築するとともに、日豪での授業研究を通して教育評価実践のあり方を探究することを目的とした。

この研究目的を達成するために、以下の 2 つを、主要な研究課題として設定した。

1 つ目は、これまでに構築してきた研究代表者自身の開発教育論をふまえつつ、引き続きオーストラリアの豊富な研究蓄積に注目して研究を進めることにより、学習者の学習の成果と課題を把握するための適切な評価課題と評価方法の設定の論理を明らかにすることである。

そして 2 つ目は、真に実践に生かすことのできる評価課題と評価方法の確立を軸として、教育評価実践のあり方を探究するとともに、構築した方法論を精緻化することである。

３．研究の方法

本研究を進めるにあたり、研究代表者は、理論と実践の往還を重視した教育方法学的アプローチによって研究課題に迫ることを重視することとした。

具体的には、まず、ウェブサイトを通じて収集した政策文書や資料等に加えて、オーストラリア等で行った調査によって得られた文献資料やインタビュー・データ、実践記録等に基づき、オーストラリアの開発教育に関連する教育評価に関わる理論と実践の実態を明らかにするとともに、そうした実態から見えてくる到達点と課題を検討した。そして、その課題を乗り越える方策を明らかにし、独自の教育評価の方法論を構築することをめざした。この作業を通して、学習者の学習の成果と課題を把握するための適切な評価課題と評価方法の設定の論理を明らかにするとともに、実践研究で利用する分析枠組みの精緻化を行った。

なお、検討に際しては、開発教育の実践を取り上げることに加えて、ナショナル・カリキュラムや全国学力調査、南オーストラリア州の後期中等教育修了資格試験（South Australian Certificate of Education：以下、SACE）に関する取り組みも対象とした。これらを検討の対象としたのは、ナショナル・カリキュラムや全国学力調査、SACE は開発教育のみを直接的な対象とするものではないものの、授業者の指導ならびに学習者の学習の到達点の把握とその後の改善という教育評価の機能を生かすための評価基準のあり方やカリキュラムへの位置づけ方を検討する上で示唆的であると考えたためである。

以上の検討を進めることと並行して、日本の実践事例を調査し、日本の学校現場での実践の可能性と課題についても検討した。さらに、主に日本の教師とともに授業研究を行い、実践から見えてくる理論の成果と課題をふまえて、理論の精緻化と、それに基づく実践のあり方を探究し、その成果をまとめた。

４．研究成果

本研究の主な研究成果は、以下の４点にまとめられる。

⑴　教育目標および評価指標の開発を通した評価課題と評価方法の設定の論理の探究

本研究の主要な目的である評価課題と評価方法の設定の論理を明らかにするためには、教育目標および評価指標の開発が重要である。これらを具体化することによって、学習者にどのような評価課題をどのようなかたちで提示し、どのような評価方法で評価することで、必要な学力の実態を把握することにつながるのかが明確になるためである。

そこで、研究代表者がこれまで研究してきたコルダー（Calder, M.）とスミス（Smith, R.）、およびフィエン（Fien, J.）の開発教育論の主張を基礎として、教育目標および評価指標の開発に取り組んだ。具体的には、「自己認識の深化」「社会認識の深化」「行動への参加」という３つの観点で教育目標を設定することの必要性とその方策を提示するとともに、各観点における認識あるいは行動の質の深化の様相を検討することを通して、これらの観点に対応した評価指標のあり方を示した。

その成果は、⑶で示した学校現場の教師や他の研究者との議論もふまえながら精緻化し、ルーブリック（評価指標）の試案として提示した。そしてその内容を、研究論文としてまとめるとともに、学会の研究集会において発表した。

⑵　教育評価実践のあり方の提案

南オーストラリア州のグローバル教育センターや複数の初等・中等学校、タスマニア州のグローバル学習センター、西オーストラリア州のワン・ワールド・センター等を訪問し、教育評価を含む実践づくりや教師教育に関する取り組みの実態を調査したり資料収集を行ったりするとともに、得られた資料の検討を行った。また、教員向けのワークショップに参加し、開発教育およびグローバル教育の視点を取り入れた実践づくりの方途を探るとともに、日本の学校現場での実践に向けた可能性と課題についての検討を進めた。

あわせて、ウェブサイトを通じて入手した資料や、現地調査（アデレード大学や南オーストラリア州の教育・子ども発達省（Department for Education and Child Development：DECD）、西オーストラリア大学等）を通じて得た資料やインタビュー・データなどの検討を行い、オーストラリアのナショナル・カリキュラムや全国学力調査、南オーストラリア州の SACE の制度上の特徴や意義を検討した。

オーストラリアン・カリキュラムと呼ばれるナショナル・カリキュラムでは、「教科ごとの学習領域」「汎用的能力」「学際的優先事項」の３次元から成るカリキュラムを構想し、そこで身につけさせたい力の発達の様相を示したり、各次元を関連づけた学習活動の例を提案したりしている。これは開発教育を直接的な対象とするものではないが、汎用的能力として示されている「批判的・創造的思考力」や「異文化理解」のための能力、学際的優先事項として挙げられている「アボリジナルおよびトレス海峡島嶼民の歴史と文化」「アジアおよびオーストラリアとアジアとの関わり」「持続可能性」等は、開発教育で想定されている学習活動と関連が深いものである。

また、全国学力調査や SACE に関しては、複数の評価課題を位置づけたカリキュラム編成や授業づくりを促すための取り組みや、評価基準を教師や児童生徒が把握することを助ける作品例の提示などが行われている。そのため、これらの取り組みや作品例を、基礎的な知識やスキル等の習得だけでなくそれらを用いてより高度な問題の解決に取り組む力を育てたり把握したりすることを念頭において分析することによって、授業者の指導ならびに学習者の学習の到達点の把握とその後の改善という教育評価の機能を生かすための評価基準のあり方やカリキュラムへの位置づけ方を検討した。

以上の成果をふまえるとともに、これまでに継続して進めてきた授業研究を通して得られた知見を追加の資料収集およびインタビュー調査等もふまえて再検討し、教育評価の方法論と具体的な教育評価実践のあり方を提案した。具体的には、⑴で述べたルーブリックの開発を進めることによって授業を通してめざすべき学習者の姿（授業者が想定する学力を獲得した学習者の姿）を具体化するとともに、学習者がそうした学力を確実に獲得することができるようにするための手立てを位置づけたカリキュラム開発を行うことの重要性と、それを実践するための具体的な方法を提案した。

⑶　授業研究の推進を通した理論の精緻化と実践の提案

理論を生かした実践づくりと実践を通した理論の精緻化を進めることをめざして、滋賀県の小・中学校の教師ならびに他の研究者数名とともに、私的な研究会を設立した。そして、およそ月に１度のペースで研究会を開催し、評価課題と評価方法のあり方を探るという視点を持ちながら、単元開発や授業づくり、授業の実施とふりかえり、単元案・授業案の改善、という流れで共同研究を行うことを基本として、議論を重ねている。こうした活動を通して、評価課題と評価方法を具体的な実践に効果的に位置づけるための方途を探るとともに、理論の精緻化と、それに基づ

く実践の開発に取り組んできた。
　また、小学校での共同授業研究を進め、開発教育を源流の１つとする「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development：以下、ESD）」に関して、パフォーマンス評価とルーブリックを活用したカリキュラム編成と授業づくりのあり方を探究するとともに、校内研修会等でその成果と課題を共有し、本研究で構築してきた理論と実践の精緻化に取り組んだ。

⑷　研究成果のまとめと学校を中心とした実践の場への発信

　これまでに行ってきた理論研究ならびに実践研究を通して得られた成果を整理し直し、教育目標の設定や単元設計、教育評価の方法論に関する到達点と課題、課題を乗り越えるための方途などをまとめ、単著『オーストラリアのグローバル教育の理論と実践 ── 開発教育研究の継承と新たな展開』（東信堂、2014 年）として出版した（なお、出版に際しては、平成 25 年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費（学術図書）」の助成を受けた）。
　さらに、これまでに取り組んできた研究の成果をふまえて、校内研修会の講師として、彦根市内の複数の小学校において ESD のカリキュラム編成や教育評価のあり方などに関する提案を行ってきた。そこではまず、学習者の学力保障および教師による授業の改善を可能にするためには教育評価を位置づけた取り組みを進めることが重要であることを提案している。そしてその上で、ルーブリックを開発して実践で活用することの重要性と意義、および、そのための具体的な方法を提案するとともに、ワークショップ形式の研修会を通して実際の授業づくりに生かしていただくための取り組みを進めた。これは、本研究の将来的な目的としていた「日本の学校教育の場で真に生かすことのできるカリキュラムや教材、単元設計、評価計画を現場の教師とともに開発する」ことにつながる取り組みであると考えている。

　研究協力者の異動等の関係で、研究開始当初に想定していた研究計画のうち、特にオーストラリアの現場の教師との授業づくりと実践を通した検証については研究計画の変更を行わざるを得ない部分もあったが、その分を、オーストラリアでのインタビュー調査の充実やワークショップへの参加を通した実践事例の調査、研究会における日本の教師との議論等を充実させることによって補い、概ね予定していたかたちの成果をまとめることができた。
　現在、本研究で得られた成果を日本の学校現場での実践に還元すべく、学会での提案を行ったり、主に ESD のカリキュラム開発や授業づくりとそのふりかえりを軸とした授業研究を進めたりしている。今後、この取り組みをさらに進めることによって、学力保障を基盤とした ESD の実践を進めるための方途を明らかにするという課題に取り組んでいきたい。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 5 件）
① 木村裕「「持続可能な開発のための教育」における教育評価実践のあり方に関する一試論 ── オーストラリアのグローバル教育研究の成果を手がかりに」滋賀県立大学人間文化学部紀要『人間文化』Vol.38、2015 年、pp.2-13〔査読なし〕
② 木村裕「オーストラリアのグローバル教育における教育評価実践の方策と課題 ── 南オーストラリア州の高等学校での実践の分析を通して」日本教育方法学会『教育方法学研究』第 38 巻、2013 年、pp.49-60〔査読あり〕
③ 木村裕「オーストラリアの後期中等教育段階におけるグローバル教育実践の可能性 ── 南オーストラリア州の SACE との関わりに焦点をあてて」滋賀県立大学人間文化学部紀要『人間文化』Vol.32、2012 年、pp.36-45〔査読なし〕
④ 木村裕「オーストラリアのグローバル・ピース・スクール・プログラムの成果と課題 ── NGO によるグローバル教育の新たな展開」オセアニア教育学会『オセアニア教育研究』第 17 号、2011 年、pp.19-35〔査読あり〕

〔学会発表〕（計 6 件）
① 木村裕「オーストラリアのグローバル教育の理論と実践 ── オーストラリアにおける展開と日本への示唆」日本カリキュラム学会第 6 回研究集会、2015 年 3 月 28 日、京都光華女子大学（京都府・京都市）
② 木村裕「求められる学力と学力保障のための取り組み ── ナショナル・カリキュラムと全国学力調査を中心に」オセアニア教育学会第 18 回大会（カナダ教育学会共催）、2014 年 11 月 24 日、桜美林大学（東京都・新宿区）
③ 石毛久美子、奥田久春、木村裕、高橋望「オセアニアの教育研究を通して見る日本の現状と論点」（「グローバル教育における教育評価の方法と役割 ── オーストラリアの学校における実践の分析を通して」発表担当）オセアニア教育学会第 16 回大会ラウンドテーブル、2012 年 12 月 9 日、玉川大学（東京都・町田市）
④ 木村裕「オーストラリアのグローバル教育実践における教育評価の役割 ── 後期中等教育修了試験との関わりに焦点をあてて」オセアニア教育学会 ECR プロジェクト第３回研究会、2012 年 7 月 22 日、

四国学院大学（香川県・善通寺市）

⑤ 井上有一、今村光章、林美帆、五十嵐有美子、木村裕、細川弘明、宮崎康子、辻敦子、岡部美香「シンポジウム『環境教育をラディカルに問い直す』」(「開発教育研究から学校教育を問いなおす ── 環境教育の実践に向けた新たな展望」発表担当）（自主的に開催した公開シンポジウム）2012 年 7 月 7 日、京都精華大学（京都府・京都市）

⑥ 木村裕「オーストラリアにおけるグローバル教育プロジェクトが構想するグローバル教育をめぐるポリティクス」オセアニア教育学会 ECR プロジェクト第 1 回研究会、2011 年 7 月 31 日、東北大学（宮城県・仙台市）

〔図書〕（計 6 件）

① 木村裕『オーストラリアのグローバル教育の理論と実践 ── 開発教育研究の継承と新たな展開』東信堂、2014 年（総ページ数：272）

② 木村裕「第 2 章第 3 節　学力調査に見る教育評価をめぐる取り組み」青木麻衣子・佐藤博志編著『新版　オーストラリア・ニュージーランドの教育 ── グローバル社会を生き抜く力の育成に向けて』東信堂、2014 年、pp.27-29 および pp.34-42

③ 木村裕「第 I 部第 3 章　開発教育研究から学校教育を問いなおす ── 環境教育の実践に向けた新たな展望」井上有一・今村光章編『環境教育学 ── 社会的公正と存在の豊かさを求めて』法律文化社、2012 年、pp.55-76

④ 木村裕「第 4 章 カリキュラム」佐藤博志編著『オーストラリアの教育改革 ── 21 世紀型教育立国への挑戦』学文社、2011 年、pp.79-103

６．研究組織

(1)研究代表者

木村　裕（KIMURA　YUTAKA）
滋賀県立大学・人間文化学部・准教授
研究者番号：９０５５１３７５

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし